

市助ものがたり

今でこそスイッチひとつで点灯できることは当りまえだが「あかり」には、人類の誕生以来、自然物燃焼に始まり、油灯、ろうそく、石油灯、ガス灯と電気灯以前にも長い歴史があり、人間の生活にとって極めて重要であった。

田中久重翁が「人々の生活を明るく、楽しい」ものにするために無尽灯、鼠灯、懐中蜀台などの考案に尽力したように、東芝のもう一人の創業者であり、「日本のエジソン」とも呼ばれた藤岡市助の開発した日本初の電球は、後の管球類の技術発展につながる基礎を成した。真空管はトランジスタから IC へとその姿を変え、X 線管に始まった医用技術は MRI・CT などへと、その先端技術を開花させている。東芝のエレクトロニクスの源流は、市助の灯した電球に端を発している。



市助 24 歳の頃

出会い



デュボスク式アーク灯

1857 年、岩国藩士の長男として誕生した市助は、8 歳から藩校へ通い、論語の素読や習字を学んだ。15 歳で転校した岩国英国語学所では、一番の成績をとり、1 年後には教壇に立つほどの才能を開花させる。この英語力こそが後の成功への「カギ」へとつながっていき、後日の英文レポートも多く残されている。

1875 年、18 歳で「工部省工学寮（東京大学工学部の前身、2 年後に工部大学校と改称）」に入学し、電信科を専攻。エアトン教授に師事し、市助が学んだものは最新技術だけではなく、

「基本の原理を重んじる」

「常に難しい問題にチャレンジする」

「真似をせずさらによいモノをつくる」

という人生に深く根差す生き方でもあった。



国産カーボン電球

市助らを助手としたエアトン教授は、1878 年 3 月 25 日日本初の電灯（アーク灯）を点灯。過去にないアーク灯の眩しさは日本の電気の歴史に新たな 1 ページを刻む。市助はこのとき、「電気がもたらす新たな時代」を予感したに違いない。この 3 月 25 日は「電気記念日」と制定され、日本の電気事業の始まりの日として今に伝えられている。

6 年後の 1884 年、市助はエジソンに出会い、「**どんなに電力が豊富でも、電気器具を輸入するような国は滅びる。電気器具の製造から手がけ、日本を自給自足の国にしなさい**」とエジソンに言われたという。

この出会いとエジソンの言葉が彼の運命を変えていく。



藤岡市助博士

試行錯誤の日々

1886年、大学教授の地位を捨てて実業界へ身を転じた市助は、エジソンからの言葉に励まされながら「電球の開発」「エレベーターの設置」「電車運転」など、次々と“日本初”にチャレンジし続けた。

市助が最初に製造した電球は2時間しか点灯しないものだったが、私財も投じながらの長い道のりと苦勞の末、輸入電球と変わらない品質を得ることに成功する。「常に難しい問題にチャレンジする」という、市助の生き方を理解するうえでも重要なひとこまである。



白熱舎 鑪屋町社屋（銀座4丁目）

藤岡市助年表と東芝の起源

明治11(1878)年	アーク灯点灯(3月25日 電気記念日)
明治17(1884)年	エジソンと出会う
明治23(1890)年	三吉正一と「合資会社 白熱舎」創設
明治23(1890)年	白熱電球の本格的製造開始
明治23(1890)年	日本初の電車運転
明治23(1890)年	日本初の電動式エレベーター設置 (浅草 凌雲閣 11月10日エレベーターの日)
明治24(1891)年	日本初の事業用水力発電所完成(指導)
明治32(1899)年	東京電気株式会社へ社名を変更
明治39(1906)年	国際電気標準会議(IEC)第1回 ロンドン総会に日本代表として参加
大正7(1918)年	3月5日 死去
昭和14(1939)年	東京芝浦電気株式会社 発足
昭和59(1984)年	株式会社 東芝に社名を変更

注) 電球製造は明治22年の説もある

1896年「白熱舎」から「東京白熱電燈球製造株式会社」に、更には、1899年「東京電気株式会社」へと社名を変更しつつ、白熱電球生産を拡大していく。

1905年のアメリカGE社と提携によって新たな技術を採用。1910年、研究改良目的に集まった世界各国の電球製造会社による会議で、ゾロアスター教の“光の神(アウラ・マツダ)”の名からタングステンランプを「マツダランプ」と命名。1911年から日本国内でマツダランプの販売を開始し、この名が広く知れ渡っていく。市助はこの間、4回洋行し多くの電力会社・電鉄会社・学会の活動に参加し電気事業の発展に寄与、「電気の父」とも呼ばれた。海外の学会でも得意の英語で質疑応答したと言われている。

生き続ける市助のDNA

「至善」とは、「最高の善」を意味する。この言葉に感銘を受けた市助は、生涯、この言葉を信条としていた。白熱電球の国産化、日本初電動エレベーターの設計、発電所建設など、日本の電気事業の黎明期に人生を懸けた彼の心には、「人々の役に立つものを創り出すこと、そしてさらに良いモノを創ること」ことこそが“最高の善”だという思いがあったに違いない。

日本のエレベーター誕生から114年後の2004年、台湾のTAIPEI101(世界一の高層ビル)では東芝が開発した世界最速のエレベーターが活躍。2008年の洞爺湖サミットでは原子力発電が見直され、東芝ライテック社が2010年までに白熱電球の生産中止を決定したように、時代のニーズと技術は変化するが、

「最新技術で暮らしを快適にする」という市助の“探求心と情熱”のDNAは、現在のそして未来の技術者たちへと受け継がれていく。



市助10歳の書